

猛暑の中で苦しむダリア達 (記録的な2010年の夏)

2010年は、記録的な猛暑と春先の低温、そしてゲリラ雷雨が頻繁に発生するなど、極端な異常気象となり、ダリアにとって受難な年となりましたが、猛暑で苦しむ痛々しいダリア達を見続けることになり、ダリアに関わる者は切ない思いをしたことでしょう。

ダリアの原産地であるメキシコの高地は、年間を通して気温が15～20℃と言う平穏な気候帯(熱帯高地型気候)にあり、ここを原産地とするダリアは当然ながら冷涼な土地を好む花です。

松尾真平著「ダリア全書」によると、ダリアがヨーロッパにもたらされ育種が進められる中で、温室栽培されたダリアが枯れ出し原因が解らずに苦慮していたとの記載があります。その折、中央アメリカを調査探検したフンボルトが、メキシコの高原地帯に赤く咲くダリアのことを報告すると、ダリアは暖地ではなく高冷地に咲く花であることが判明し、その後、飛躍的に研究や品種改良が進んだと書かれています。日本国内でも、冷涼な土地を好む花として、国内各地で栽培されていますが、ヨーロッパとほぼ同緯度にある北海道にも早くから導入され、広く栽培がおこなわれて来ました。

1. 2010年の猛暑をデータで見る

昨夏は全国的に暑く、連日のように猛暑日はもちろんのこと最高気温が35℃を超える「酷暑日」が続きました。山形県米沢市の7月～9月データを見ると、月平均気温の平年比で1.5～2.2℃高くなり、また、8月の気温を見ると、全国で軒並み2℃以上高くなりました。

ここで、ダリアの生育条件とこの夏の気温の関係を知るため、ダリアの生育適温(15～25℃)と限界温度(30℃)と言われている温度帯を元に、任意に2010年の平均気温が25℃を超えた日数と最高気温が30℃を超えた日数を表にしてみました。

6月～9月(122日)		米 沢	千 葉	大宇陀	多治見	旭 川	雫 石	軽井沢	阿 蘇
平均気温が 25℃を超 えた日数	2010年	46	<u>91</u>	57	<u>81</u>	7	26	0	0
	2009年	7	47	22	<u>61</u>	1	0	0	0
	平年値	0	48	0	58	0	1	0	0
最高気温が 30℃を超 えた日数	2010年	53	<u>67</u>	<u>61</u>	<u>90</u>	16	34	15	0
	2009年	11	10	42	<u>81</u>	6	5	0	0
	平年値	0	24	8	58	0	0	0	0

以上が、ダリアに縁のある地方のデータです(多治見は参考値として使用した)。

一目で、暑かった夏を読み取ることが出来ました。千葉(千葉)や大宇陀(奈良)、多治見(岐阜)では、平均気温25℃、最高気温30℃を超える日が対象期間(6～9月、122日間)の5割を超え、また、米沢(山形)でも厳しい数値となりました。この間、ダリアの生育は停止もしくは減退していたと考えられます。今後、このような気温が続くことになると、ダリアの露地での栽培は厳しいものになると言わざるを得ません。

そして、ダリアの天恵国と言われている日本でも、露地栽培の適地は旭川(北海道)、雫石(岩手)、軽井沢(長野)、阿蘇(熊本)などのデータで見えるように、北日本や高地の限られた地域になってしまう恐れがあります。

2. 枯れだすダリア達

2010年の春（4月から6月上旬）は、例年に比べて長雨等の悪天候の影響もあり気温の低い日が続きました。川西ダリヤ園では球根植付けが遅れ、また、その後の寒さもあって発芽が進まず、例年に比べ生育遅れの状況となりました。冷夏が予想された中で、いずれ気温の上昇に伴い回復するものと考えていましたが状況はなかなか改善されず、7月中旬には開花を見せる早生品種の一番花に、大きな遅れが出ました。春先の低温の遅れが特に深刻だったのが、川西ダリヤ園と姉妹園である東京町田ダリア園でしょう。6月下旬の開園時に開花数が数輪と関係者をがっかりさせると共に、ダリアファンをしばらく待たせることになったと聞きました。

そして、涼しかった気候が一気に上昇に転じ、予想を裏切る真夏の高温期に入って行きます。ダリア達は7月上旬には生育が減退し、特に生育の芳しくない株については生育が停止し枯れるものが出始めました。何とか生き残る株を見守りながら球根や代替株の植え替え作業を進めるも、猛暑が続くなかで枯渇株が増え続けました。なおも状況の悪化が続くなか、川西町内の露地の切り花園地に大きなダメージが見られ、農家の中には早々に出荷断念を決める人も現れました。

この夏は、暑さに耐え咲いたダリアでも、露心花や花卉数が極端に少ない奇形花が数多く見られましたが、これらは高温異常によるものと考えられます。(写真)

暑さの続いた7～8月には、各地で降水量が例年の60%以下(図参照)となりましたが、川西ダリヤ園内では乾燥のため園地に大きく深いひび割れが発生し、海水浴場の砂のように熱せられる日が続きました。また、切り花栽培園で球根腐敗が大量に発生しました。川西の切り花園地は水田(転作地)が多いことから排水対策がこれまでも課題となっていました。球根腐敗の原因は高温期に激しく降った雨が排水されず、高温と湿度によって「茹でられた状態」となったことによるものと考えられ、排水対策の重要性を再認識させられました。

一方、西日本から関東では台風やゲリラ豪雨により局地的に大量の雨が降り、河川の氾濫や増水で園地の表土が流される等の被害が発生したと聞き、自然の猛威の前での無力さを痛感する夏でもありました。

降水量	米 沢		千 葉		相模原		大宇陀	
	2010年 (mm)	平年比 (%)	2010年 (mm)	平年比 (%)	2010年 (mm)	平年比 (%)	2010年 (mm)	平年比 (%)
6月	23.9	<u>24.4</u>	93.5	67.2	116.0	<u>58.7</u>	204.0	92.8
7月	92.0	<u>59.3</u>	62.5	<u>47.7</u>	78.5	<u>42.1</u>	273.0	149.3
8月	103.0	72.4	24.5	<u>21.1</u>	64.0	<u>32.2</u>	25.5	<u>18.2</u>

3. 散水を始める

そんな中で、川西ダリヤ園では8月に入りようやく夕方の散水を始め、併せて、活力剤等の葉面散布を続けて行きます。そして、8月下旬になり気温が少しずつ下がり出すと、ようやく栽培環境に改善の兆しが見え出し、生育の回復と同時に開花が進んで行きました。この夏ほど散水の効果が見られた年は無いでしょう。散水対応の可能だった園では何とか開花が進みましたが、球根増殖園など散水が出来なかった園では回復が大幅に遅れることになりました。

この様な状況で唯一救いだっただのが、高温を好む病害虫（特にハダニ類）の発生が6月下旬から7月に少なかったように感じたことです。8月には発生が見られましたが、開花前の初期段階からハダニが発生していたら、園内は夏を待たずして全滅となっていたことも考えられたからです。

4. 今後のダリア栽培は高温対策がカギに

前理事長の岩佐吉純氏は、生前に「今後の日本におけるダリア普及のカギは、冷涼地を好むダリアから高温栽培に適したダリアを作り出すことにある」と言われていましたが、猛暑の中で枯れ出すダリアを見ながら、その言葉を思い出しその重みが胸に深く突き刺さりました。前記の「ダリア全書」によると、ブラジル・アマゾンにダリアのつる性原種があったと書かれています。赤道下のアマゾンに自生する種とあれば、高温に強いことが想像されますが、そのような種があるとすれば、高温下での栽培に耐えうる品種を作出することが可能かと考えられます。しかし、実現には育種家の力をお借りするしかありません。

栽培環境の見直しも必要でしょう。通気性を確保するため密植栽培を避け、株間を十分取り、また、排水性の高い土壌を選定すると共に、傾斜地の利用や夏に何らかの遮光を可能とすることも考えなければなりません。

一方、ダリアのメインシーズンが「切り花ダリア」の業界では変わりつつあります。露地では夏から秋にかけて賑やかに咲くダリアも、切り花のダリアは日持ち性や色彩の鮮やかさの面から課題が多く、その解決策として施設を使い電照栽培による周年出荷体制が確立されてきました。このことにより「ダリア＝冬花」のイメージが強くなっているのです。今後、2010年のような高温が続けば、露地物の品質低下や日持ちが期待されないことから、市場では夏場における取扱量の減少・敬遠も想像されます。対策として、夏にしっかりと咲く（強い）品種の選定と排水対策等を徹底するなど、しっかりとした管理体制が必要となるでしょう。

内 谷 新 悟



立ち枯れ状態のダリア①



立ち枯れ状態のダリア②



奇形花①



奇形花①